

と ネットワーク



△祭りのときは大変にぎわう毘沙門天



安全で活気あふれる 住みよいまち 元吉原

このコーナーでは、公民館単位に各地区の話題や人物を紹介します。あなたの地区でのちょっとしたこぼれ話、出来事、ご意見などありましたらご連絡ください。12月は浮島地区です。

連絡先…市内永田町1-100 市広報広聴課 ☎51-0123 内線2822、締め切りは毎月15日です。

元吉原地区は、風光明媚な松林が田子の浦港まで続く海浜地区です。地区の歴史は古く、古墳時代から奈良平安時代の集落址三新田遺跡や、中世には今井郷として現在の今井地域のあたりが記録に残されています。

明治二十二年、東海道線が開通すると、地区内に鈴川駅(吉原駅)がおかれ、以後吉原地域の玄関口として発展してきました。

また、景観は変わってしまいましたが、昭和三十六年に田子の浦港ができるまでは、吉原湊として名勝「逆さ富士」が心に残ったところでした。

地区は旧東海道と現国道一号線に沿って東西に長く集落が続き、東海道線と浜の間は、住宅と商店とが混在した住宅密集地域となっています。

地区内には田子の浦港石油基地、砂山の急傾斜地、海岸堤防のかさ上げなど防災の問題、また住宅密集地の生活環境の改善、松林、浮島沼の保全など解決しなければならぬ課題があります。



△写真左から完君、由紀子さん、亮さん、博さん、秀君、まさ子さん



剣道一家

柏原一丁目 高木さん一家



昭和五十五年に結成された「元吉原剣道スポーツ少年団」。団長の高木亮さん(四十六歳)の一家は、親子三代にわたる剣道一家です。今回はつわものぞろいの高木さん一家におじやましました。

高木さんのお宅で最初に剣道を始めたのは、おじいさんの博さん(七十六歳)。「始めたのは二十一歳のときで四段を取ったよ。昔は軍隊にいたからね」と、色つやのよい顔は年を感じさせません。

一時、体を悪くして今はやらなれないといいますが、ピンとした背筋は往年をうかがわせます。

そんな博さんの影響で、亮さんも学生時代から剣道を始めました。現在、七段。週に二回少年たちを指導し、そのほかの日に自分の練習を重ねます。やさしそうな目元も一たび防具をつけると厳しく、周囲からは「鬼の高木」と呼ばれているとか。「剣道は性格にぴたり。試合の緊張感がたまりません」と語ります。

また、亮さんの影響で剣道を始めた長男秀君(富士東高三年)は二段、次男完君(元吉原中三年)は初段と、まさにカエルの子はカエル。でも、二人は口をそろえて「お父さんにはかなわない」と言います。

おばあさんのまさ子さん(六十七歳)とお母さんの由紀子さん(四十一歳)は「親子で剣道について語り合う姿は、とても頼もしい」と目を細めます。親子三代で計十四段の高木さん一家は、剣道を通じた、かたいきずなどで、つけ入るすきがないと感じられました。



第42回沖縄国体、空手競技の部に出場

五十川敬子さん

(吉原緑ヶ丘・24歳)

練習は一時間半ずつ週四回、成年女子では県内に敵がいません。支部長の渡辺邦義さんは「天性のスピードとバランスに加えて練習熱心」と力を認めます。年ごろの乙女ゆえ、強い女のイメージはいかががかと思えば、「人にエーホント!?と言われるのが好き」という明るい性格。空手に理解のある花婿さん募集中です。



男のスポーツと思われがちなスポーツ、空手。五十川さんは昭和五十八年に続き、一回目の国体出場を決めた女性空手選手です。身長百四十八センチと小柄ながら

空手着を着るとなせか大きく見えるから不思議。現在一段。黒帯のほころびが、けいこの厳しさを物語ります。

吉原一中二年生とき「武道にあこがれて」日本空手協会富士支部に入門。「初めは女だてらにと両親、特に父から反対されました」と笑います。

まちか

我がまちを語る



小川源太郎さん

今井東町(73歳)

海と深いつながり

昔の元吉原の人々の生活は、海と深くつながっていました。人々はほとんどが半農半漁で、田子の浦港から大野町のあたりまで、たくさんの方が漁業の権利を持ち、船を持っていました。

毎年三月下旬から六月までは、天気さえよければ毎日のように網引きが行われ、とてもにぎやかでした。学校が終わると浜に出かけ、網引きのあとで空きびんを拾って、小遣いかせぎをしたものです。そうした海の生活の名残か、元吉原の人は気が荒いといわれたこともありました。しかし、今では「困ったときはお互いさま」という厚い親切心が伝わっています。昭和四十一年の台風二十六号のあと、防潮堤が高くなり安全なまちなりになりましたが、津波と海岸浸食の問題は、自然が相手なだけに心配です。将来にわたって関心をもち続ける必要があると思います。

あの人この人こんなこと



日本一の花の駅に

小川守夫さん(柏原町)

元吉原の秋の風物詩といえば、東田子浦駅の菊花展。三十一回目を迎えたことは、十一月二十三日まで開催されています。菊は地元「ふる里の駅を花と緑で飾る会」の皆さんが、丹精こめて育てたもので、その数五百鉢。第十三回から会長を務める小川さんは、「東田子浦駅を日本一の花の駅にするよ」と張り切っています。



俳句の道を五十余年
吹き抜くアサギさん(鈴川浜町西通)
明居よし
立子

市立博物館で開催中の郷土の俳人展。郷土を代表する俳人の一人川上さんの作品も展示されています。十七歳のとき、お父さんから「落ち着きのある子になるように」と俳句を教えられ、以後五十余年、「五・七・五に自分の思ったことを素直に表現し続け、最近やっと俳句の心がわかるようになりました」と奥の深さを語ります。

海にロマンを求めて

渡辺公男さん(今井東町)



スキューバダイビングといえば、最近人気のあるマリンスポーツ。海の近くに生まれ育った渡辺さんは、かれこれ十七年の経歴を持つダイバーです。「緊張した心持ちで挑む海中は、自分一人の別世界。この魅力は潜った人でなければわかりません」と語ります。海のロマンを求める渡辺さんは、乙姫様も探しています。

